
リンドールの女神

ともみつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リンドールの女神

【Nコード】

N5382E

【作者名】

ともみつ

【あらすじ】

俺の店にあるクラブサン。スタッフの誰もが興味を抱かない哀しきクラブサン。それでも居たんだ。クラブサンの、リンドールの女神が。

（前書き）

元々は、企画参加の作品として執筆してましたが、作品を変更することにしたので、ちゃちゃっと執筆を切り上げて、書き終えた作品です。

まあ、未完成の完成なので、暇つぶしに時間のある方はご覧下さい。

気がつけば、恋をしていた。

それが恋なのか、仕事なのかも気づかないほどに。

だが、気づかなかった思いは、気づかない相手にも同じ。

俺が気づいた恋が、女神も気づく恋なのか、それが分らなかった。

「施錠よし」と

店内と玄関を確認して、モールに入る店舗用の裏口から出る。モールに出店してから一年ほど。その間の休みはほとんどない。店を持つことが夢だった。それが叶った。土地を構え、店を建て、営業する。それは金がかかりすぎる。モール建設の際にダメ元で申し込んだから抽選に当選した。俺はなかなか運が良いと、順調な営業利益を出す今も、いつか夢見る単独の店の営業へ日々働く。

「結構広いんだなあ」

オープンからまともに見る機会のなかった閉館後のモール。まだ明かりのついた店舗も多い。それを見ると自分の店の施錠が早いよな気がして後ろ髪を引かれる。店には誰もいないというのに、いつも自分がいないと不安なのは経営者として失格なのは理解してるけど、踏ん切りがまだつかない。

モールがオープンして、他の店舗を一貫し物客として見るのは、今日が始めてだ。どの店も閉店して買い物は出来ないけど、その規模と装飾には羨望を感じた。

「ん？ …… まだ流してたのか」

薄暗いモール内に響く歌声。聴いたことはない歌。最近の流行は分らなくなった。考えることは店のことばかり。クリスマス商戦前。歌とかファッションとか気にいられた大学時代のような日常はなく、経営のことで頭が一杯だ。

「ちよっと一服していくか」

誰も居ないフードコートのオープンテーブルスペース。各店舗が共有する場で、俺の店も店内と共にお客様に利用してもらっている。その角に閉店時間を過ぎてから開店まで、最も明るい光を放つ自販機で珈琲を買う。カフェを営業してる俺の店の近くに自販機があるのは、正直好い気はしない。でも今だけは缶コーヒーの温かさが一日の疲れを労ってくれる。

吐き出す煙が天井へと消えていく。煙たさを流し込もうとブルトッブに手を掛けるが、衛生上の配慮で爪を切っていたせいで、美味くふたが開かず、疲労に少し腹が立った。

「開けにくいな、これ」

もつと開けやすいブルトッブにして欲しいもんだと、タバコを啜えながら店の鍵で開けた。

「にしても、この歌、なんか良いな」

透き通るような小さな響きが癒しになる。少し清掃の音でかき消される音色は、コーラスも演奏もない独唱。聞こえる歌詞は恋愛ものだろう。恋とかつまんないとか気があったとか聞こえた。

「恋、かぁ。ご無沙汰だな」

仕事が恋人とか言うだけなら格好良く見えたりするかもしれない。でも実際に恋人は仕事状態だ。格好良くも何ともない。悟ったかもしれない。

「所詮ゆとりのない奴の言い訳か」

仕事の充実。仕事へ追われ、仕事馬鹿になる。人間だから本能には逆らえないってのに、その時間を割くことが自分で出来ない。だから仕事で恋人と負け惜しみになる。「すっぱいぶどう」そのものだ。でもしょうがない。気になるんだよ、経営者になると。

「帰って寝るか」

家に帰ってからいちいち何かをしようと言う気力はもうない。煙草をさつきゴミ回収に来たおじさんに申し訳ないと思しながら、誰も捨てていないゴミ箱に放り込み、珈琲も飲み干した。ゴミ箱から音が思った以上に響いて、少し人目が気になった。

「ん？ 何だ？」

薄暗くてよく見えない。でも、何かが吹き抜けになってる階下から見えた。もしかしたら掃除業者か店のスタッフかもしれない。どつちみち一階の高級ブティックの立ち並ぶフロアからしか外には出られないから、静かなモールに響く靴音に、ちよつと俺って格好良く歩いてるんじゃないか？ とか、わざと靴音を響かせて歩いてみた。

その時だった。聞こえていた音楽が俺の靴音に合わせてテンポを落とした。そして歌声も小さくなる。

「え？」

—— 私、だけの、恋……。

「？」

俺の靴音が止まった。俺を癒し続けていた歌も止んだ。暗闇に突如出現した淡い光。

「BGMじゃ、なかったんだ……」

「はい？」

暗闇の中は不安だ。光を求めて彷徨い続けるのは疲れる。そして、一つの光を見つける。疲れた体と不安の心にはあまりにも華麗で、その姿に魅せられてしまう。旅人を癒す女神のようであり、天女のように近づきたい雰囲気を感じつつも、それが歩み寄るだけで燃え尽きそうな熱を帯びていようと、魅せてしまう。そして近づいた羽虫は燃え尽きる。触れることも言葉を交わすことも出来ないけれど、それでも良いと思って飛んでしまう。

「あ、いや。いい歌、だね」

吹き抜けの天井はガラス窓。冬の張り詰める空気に澄んだ月明かりが、グランドフロアに立つ彼女を世界から隔絶させる牢獄のように、彼女はガラスの形に切り取られた月明かりの中にいた。

「え？ あ、聞こえてました？」

恥じらいは美しさを増し、姿が茫漠としている俺に届く。急いで帰らなくて良かったと思った。

「フードコートまで聞こえてたから、てっきり音楽かけてるのかと思っ
て」

まさか歌っていた声だなんて思いもしなかった。そしてこの子は
舞台を使いこなす才に溢れていた。だから観客の俺は彼女の歌声に
引き寄せられた。そう思えるほどに幻想的だった。

「歌、好きなの？」

「はい、好きですよ」

——好きじゃなければ歌いません。

水溜りに、初めて買ってもらった長靴で飛び込むムジヤキな子供
のように、彼女の目は輝きを生み、その両手は月明かりを己のもの
と主張するように空へ伸び、俺の視線は天井に向いた。何も無い。
ガラス天井から月が彼女を照らし、俺には柱の影を落とした。

笑みを浮かべる彼女は、そこに佇み続ける。花だと思った。満月
の夜にしか咲くことがない、一夜限りの月夜花。

「あの……」

「え？ あ、何？」

すると、花は俺に語りかけてくる。

「まだ帰らないんですか？」

天使の輪。彼女の頭に白く輝いている。首を傾げて聞いてくると、
我が流れる髪に沿って大きくなった。

「これから帰るよ。君は帰らないの？」

会話を終わらせたくない、質問で返した。

「私は、これから面接なんです」

「面接？ こんな時間に？」

フロアにある時計に目を向けると、すでに今日が終わっていた。

同時夢が覚め、焦りが生まれた。所詮俺の恋人は仕事なんだ。女神
を前にしても、仕事の支配力は圧倒的だった。早く帰らないと寝る
時間がない。女神を前に考えてしまった。

「そつなんですよ。私、ここがオープンした時に、お気に入りのお
店を見つけたんです」

「確かに良い店が多いしね、ここって

閉店後の様子しかまともには知らないけど、集客数から考えるとそう判断できる。

「そうなんですよ。リンドールってお店なんですけど、すっごく私の好みだったんですよ」

カフェリンドール。モールオープンと同時に出店した店舗。と言うか、俺の店。親に借金して作った夢。完済はまだまだ、順調に歩んでいる道のり。

「へ、へえ。そんなに好きなんだ？」

すぐに俺の店だと伝えたかった。けど、俺は時を認識した以上、暗闇の光に釣られる羽虫ではなく、経営者に戻ってしまった。だから、こんなにも可愛い子が気に入ってくれたことに対して、感想と意見を欲する気持ちが湧く。無論下心も。

「落ち着いた雰囲気と美味しい珈琲とケーキ、可愛い店員さんの制服に、それに……」

「それに？」

彼女が初雪を掴むように月明かりの輪の中を回った。流れ舞う髪に、俺は弱かった。

「クラヴサンが素敵なんですっ」

両手を胸で組み、満面の笑顔の彼女の言葉は、俺に振り返ると同時に放たれた矢のように飛んできた。ドキッとした。そして驚かされた。

「知ってるんだ？」

「え？ クラヴサンのことですか？」

驚いた。彼女がクラヴサンのことを知っているなんて。

クラヴサン。一般的な言葉に変えるなら、ドイツ語でチェンバロ。グランドピアノ型の鍵盤楽器。もっと分類すれば撥弦楽器。ピアノのような形をしているのに、その音色はバロック時代を象徴させる独特な音色。俺が好きで、店を作る時に必ず置きたいと安いものを探しに探して見つけたお宝。開業資金の数割を軽く費やした。

「当然ですよ。私、クラブサンの音色が一番好きなんですから」
そんなことも知らないんですか？ と、俺が知らないことが心外だとも言う。知るはずもないのに、どうしてか雰囲気的に謝りそうになった。

「俺もなんだ。あの通奏低音に欠かせない音色って良いんだよな」

「そうなんですよっ！ バロック音楽には欠かせないし、今だってあんな素敵な音色はないですよ。一度衰退したのに復活して、今じゃ幅広い場で使われてるんですよ。私、この前友達と映画に言っただけですけど、その映画のBGMにも使われて、サントラ出たら絶対買ってもらいなんです。あなたも買いませんか？ 予約しましょうか？」

「い、いや。発売してから考えるよ……」

やばい。荒野に咲いたはずの花が、急速に室内に飾ったコップの花に見えてきた。花は喋らない方が良さそうだろ。高鳴りが落ちて着いてきた。

「クラブサンの良さを知ってる人がいるなんて。もしかして奏者の方ですか？」

彼女が月の輪の束縛から飛び出して、俺の目の前に来た。吸い込む香りと握られる手から伝わる感触と温もりに、胸の高鳴りが何倍も強くなった。

「いや、君は演奏するの？」

「たまーにですけど。最近は全然」

高くて買えないですし、と笑う。俺は驚かされる。あれを弾ける人が居た。あの音色を出せるのか、この子は、この俺の手を握る手は。

「あつ、そろそろ時間かも」

唐突な終わりを彼女が言う。冷たくなる手が恋しさを求めたが、押さえた。

「じゃあ、俺もそろそろ帰らないと。明日、いや、今日も早いし」
「あれ？ お店の人なんですか？」

この子は一体、閉館したモール内にいる俺を誰と思ったのか。

「まあそんなところ。面接なんだっけ？ 頑張つて。君ならきつと受かると思うよ」

「本当ですか？」

俺は面接官でもなんでもないから、確証なんてない。でも、印象から来る勘には自信があつた。第一印象と出会いによる錯覚かもしれない。それでも良いじゃないか。そう思う。

「大丈夫。君みたいな子はこのモールにはよく似合うから、面接する奴も明日から来てくれって言つて言つて。つーかいわない奴がいたら俺がそいつをクビにしてやる」

それが俺ならきつと、間違いない。

「あはっ、面白い方ですね。でも、ありがとうございます。実はちよつとだけ不安だつたんです」

「え？ そうなの？」

あんなに楽しげに歌っていた女神にも不安があつた。驚いた。むしろ悩みなんかへノカップと笑い飛ばしそんな雰囲気の子なのに。

「でも大丈夫です。勇気をもらいましたから。私、行きますね」

「ああ、落ち着いて頑張つて」

「はいっ」

静かなフロアを掛けていく。どこまでも響く靴音に混じつて鼻歌がかすかに聞こえた。さっきよりも幾分かトーンの上がつた。

「バイトかぁ。ウチには来ないからなぁ」

クリスマス商戦から年末年始にかけてウチの店もバイトを募集してる。それでも名前が他店に比べて売れてない以上、どうしても同時にバイト募集を出す機会の多いモールだと、取られてしまう。不採用で来る子は、明らかに覇気とやる気がない。だからウチも取れない。こうなる以上は、今のスタッフで回せる限りをするしかない。だから連日休みもろくに取れず、悩みの種が増える。

「とにかく帰つて寝よう」

明日の営業に響く。従業員専用口から出る。さっそく仕入れ業者

の大型トラックが積み下ろしをされていて、軽く挨拶を済ませてマフラーを深く被りながら、他店との仕入れ量の桁違いに、寂しくなった。

「さみつ」

外気の触れる部分が痛かった。澄んだ夜空が見下ろしていて、見上げると星の多さと月の眩しさに寒さを少し忘れられた気がする。

「あれ？ どこやったっけ？」

寒空を孤独に歩いて二十分ほど。マンションの入り口に来て、鍵を取り出そうと突っ込んだポケットに感触がなかった。ズボンからコートまでポケットと言うポケットに手を突っ込んでみてもなかった。もちろんカバンの中も。

「うっわ、マジかよ……」

店の鍵はあった。でも肝心の家の鍵を忘れた。多分、着替えの時にロッカーの中に落ちたんだ。取りに戻るしかなかった。

背後から通り過ぎる車のヘッドライトが遠ざかると、視界が一気に暗くなって、風が冷たく、人恋しく、少し泣きたい気持ちだった。「ちよつと、何してるんです？」

「え？ あ、すみません」

警戒する声に、眩しい光が目を打つ。モールに戻ってきていきなり犯罪者にされた気分。

「閉館時間は当に過ぎてるんですよ？ 店舗関係者の方ですか？」

「そうです。リンドールのこういうものです」

身分証明になるもの、と財布から名刺を出して、歩み寄ってきた警備員に見せる。

「それで、ご用件は？」

「家の鍵を忘れてしまいました」

「しっかりして下さいよ。深夜業務申請の店舗もありますんで鍵は開いてますが、早めに戻ってくださいよ」

俺のことを信用してくれたみたいで、ちよつと面倒そうに息を吐かれたけど、立ち入りを許可してくれた。

さっきまでついていた明かりも消えて、人影もほとんどなかった。誰も居ない学校以上に恐怖感がある。時々響く業務中の店舗の音にも背筋が震えた。

！

「な、何っ？」

フードコートに上がった瞬間、音が突沸するように響いて、体が硬直した。

「何の音……って、あれ？」

突沸した音をきっかけに、メロディーが形成されていく。その曲が何かは分らない。でも、深夜のフードコートに、何かに阻まれる音色を放つものには覚えがあった。

「クラブサン……？」

一度思い込むと、自分の店から聞こえているような気がしてならない。ドアの鍵を開けようと鍵を回す。

「あれ？ 開いて、る？」

回らなかった。つまり鍵はかかっている。何か危険な香りを感じつつ、泥棒とか強盗の可能性もあるから、少しずつあける。すると音色が飛び出してきた。ウチのクラブサンの音だと、直感した。

「誰か、いるのか？」

恐い。掛けたはずの鍵が開いてて、俺のクラブサンを何ものかが奏でている。泥棒にしては不審すぎる。面白半分で弾くには上手い。迷いのない、楽しい音色。

「あ、れ？ ……え？」

泥棒はいなかった。強盗も。でも、代わりに女神がいた。店内が真っ暗な中で、非常灯のかすかな緑光の中で、女神はバロック時代から零れ落ちてきたように、リンドルの店内でクラブサンの鍵盤にしなやかな指を走らせていた。

「？ あれ？ さっきの方じゃないですか？」

俺の声が届いた。女神の指が止まり、夢を見ていた瞼が開き、俺を捉えた。

「いや、何してるの、君？」

「ダメですよ。営業はとづくに終わってますから。早く帰らないと警備員さんに叱られますよ？」

俺の言葉は無視か。ここの経営者相手に、よく言えたもんだ。

「それは分ってるよ。と言うか、鍵、掛かってなかった？」

「開けてもらえました。警備員さんにもお話が通ってたみたいです
ね」

笑顔の彼女。俺も笑う。そんな話は聞いてないぞ、と心で考えつつ。警備員が誰だったのか、問い詰めたいところだ。

「そう。それで、面接って、ここ？」

「はいっ。フロアスタッフ募集してたんですよ。お給料は安いなあとは思ってたんですけど、やっぱりこれですよねえ」

女神が再びクラブサンに手をかける。その音色は美しい。やはり女神だと思わされる。しかし、給料が安いとか悪かったな。他店より資金が少ないからしょうがないんだよ。

「どうですか、これ。素敵ですよ。私欲しいなあ。譲ってもらうとか出来ないんですかね？」

「さあ、どうだろう。難しいんじゃない？」

「ですよ。あーあ、ざんねえん」

少し頬を膨らませながら、クラブサンを撫でる。

「あつ、埃が付いてる。んもあ、ここのスタッフさんはしっかり掃除してるんですかね？ この子、年代物のすごく素直な子なんですよ。絶対高いものですよ。そう思いませんか？」

「……ああ、うん。そうだね」

俺を怒らせたのか、褒めたいのか、よく分らない子だな。

「そう言えば、どうしてここにいるんですか？ 帰られたんじゃないんですか？」

思い出したように俺を見る。

「いや、忘れ物をして戻ってきたんだ。そしたらこの音が聞こえてさ」

「ああ、そうだったんですか。何か偶然が続きますね」

そう女神が笑う。いや、女の子が笑う。女神からいつの間にか俺の目には、少し間違えば犯罪者という認識に移ろい始めていた。

「じゃあ、俺取りに行くから」

「あ、はい。おやすみなさい」

立ち上がろうとしない女の子。これはどうしたものか、しばし考える間もなく、俺はドアから出た。

「警備員に連れ出してもらおう。ついでに注意もしないとな」

普通に考えればこんな時間に面接をする店なんかない。警備員も勝手に判断してんじゃねえよ。可愛い子とバイト募集とは別問題。そう割り切って警備員を探す。

——何となく、気があつて——

深夜の暗いモール内に聞こえてきた歌。独唱と演奏の共演が、俺の足を止めた。

——何となく、傍にいたくて——

聴いたことのない歌。それでも今日二回目。はっきりと聞こえるその歌に、俺は来た道に戻っていた。自分でも気づかなかったくらいに、自然と。

——そんなつまらない恋、したことありますか？

鳥肌が駆け抜けた。女の子が居たはずなのに、やはり女神がいた。透き通る歌声に、歴史の音色が店内に響いていた。俺はその瞬間、落ちた。届かなくても、そこには女神が居る。そこが女神の居る場所だと。仕事が出来なさそうとか、我儘そうだと思っていたくせに、それでも良いじゃないか。

「あれ？　どうかしたんですか？」

俺は所詮、暗闇に浮かぶ炎に近づいて燃え尽きる、哀れな羽虫でしかないんだ。

「ごめん、実は俺が、このリンドールの店長の葉山です」

「え……？」

微笑の女神が見せた、不思議そうな驚き。全てはこの瞬間に始まったんだ。

「おはよーございまー……した」

「あつ、すずりさん帰らないでっ」

「いやあ、リンドールって落ち着いた雰囲気だけど、暗くはなくなかったっけ？」

「そうだけど、今日はほら、小波さんの……が、だから」

「ああ。それで店長落ちちやつてる？」

「うん。これじゃあ営業出来ないかもよ」

「よし。ここはあたしに任せなさい。おーい、店長」

あの日から一年。昨日の俺は懐かしき日々を思い出して、後悔の涙に枕を濡らした。

「ありやりや、随分落ち込んでるねえ。告つてもないのに、情けないぞ、男の子」

「っ！？」

あの日から一年。今日は女神の結婚式。あの日、俺を魅せるだけ魅せた女神は、今日、結婚する。俺の知らない男と。

「ああっ、ダメだよすずりさんっ、そんなこと言っちゃ」

「どうして？　ただの片思いじゃん。もう諦めないとさ、不倫でもさせたいの？」

「んなわけないだろ。スタッフの晴れ舞台を汚すな」

「僕だけの女神を、じゃないの？」

「うっ……」

すずりさんはウチのキッチンチーフ。隣ちゃんはバリスタ。仕込

みの段階から出勤する早い二人。その二人が朝から俺を虐める。もう少し慰めてくれても良いじゃないかよ。

「入れ込んでたもんねえ。会計間違えるわ、釣り銭多く渡すわ、皿割るわ、メニュー聞き間違えるわのダメダメ新人にさ」

「いや、あれは経験不足で仕方がない子だったんだよ」

「その割には店長、私たちみたいに叱らないよね？」

「そーそー。あたしなんかさ、材料ちよつと無駄にただけで十分説教されたし。出るところ出る？」

「二人とは経験と時間がだね……」

この二人は基本的におしゃべり。仕事は出来るから良いんだけど、共謀すると困る。

「黙れ、告れもしないナヨ男め」

「うっ」

すずりさんははつきり物を言うから、今日の俺には大打撃。

「まあ店長が好きそうだもんね、あれを弾ける凄い才能持ってるし」

「そうだもん、じゃなくて、そうなのよ、ねっ？」

隣ちゃんの視線の先にはクラブサン。あの日の女神は、たまに営業中に店内BGMとして演奏を披露した。その見事な腕前に、俺は誇っていた。そして、その演奏する姿に惹かれ続けた。

「よしっ！ 店長」

「は、はい？」

すずりさんが俺の肩を叩いてきた。痛い。

「あたしはぶつちやけこのままあの子が寿退社してくれるんなら、経営が安定するから万々歳だけど」

「痛いこと言うね、すずりさん……」

否定したいけど、経営上で言うなら、とっくにクビでもおかしくないのが女神だった。

「告白の一つも出来ない情けない店長に甲斐甲斐しくついてくる従業員は、店長に好意を持ってるか思いもしない君に、お姉さんが許可しよう」

「え？ すずりさんって、店長が好きなの？」

「え？ そうだったの？」

気づかなかった。いつも経営者の俺をからかってくるのは、深い愛情の裏返し？

「んなわけないじゃん。あたし彼氏いるし」

「だよ、知ってたけど。と言うか、私たちカップルで来てって招待されたもんね」

「酷い、二人とも……」

何もこんな日にそんな冗談言わなかつたって良いじゃないか。

「はいはい、落ち込まない。そこで一つ提案があるのですよ、チーフとして」

「……何ですか？」

すずりさんの提案は、嫌なものしか感じない。前に俺のクラブサンを集客アップさせるために、テールを入れる為に売りに出そうと見積もりまで出してたし。売らなくて良かった。

「小波ちゃんが独身で居られるまであと半日もないのよ。人妻になつてからだと色々と面倒になるよ。人妻フェチなら別、と言うか、余計に萌える？」

悪魔が居る。小悪魔なんて可愛い悪魔が。女神の店に悪魔はいちやいけないのに、今は悪魔しか居ない。

「んも。すずりさん、冗談はそれくらいにしないと」

「はいはい。燐ちゃんが恐いからズバツと言うわよ。良い？ 心して聞け、男の子」

すずりさんが真剣な眼差しで俺を見る。思わず唾を飲んだ。喉が鳴った。

「小波ちゃんのことが好きでも、祝福できる自信がないなら、もう一つ方法がある」

「そ、そんなのがあるの？」

ある。すずりさんが断言する。無駄に格好良い。

「あんたは小波が好きなんでしょ？」

「う、まあ……」

ズバッと言われると照れる。

「片思いなのに照れる？ 普通。と言うか何で店長、先に告白しとかなかったの？」

「燐ちゃん、最近毒されてきてない？」

だって、気づいたのは後から。でも気づいた時には最初からだつた。長い時間を浪費してしまった。その後悔が形になって突きつけられると、辛い。

「それは良いから。それよりも店長。男だつたら決断しなさい」

「な、何の？」

すすりさんが俺の肩に手を置いて、笑う。小悪魔なのか、真剣なのか良く分らない。隣で燐ちゃんも様になる大人の笑顔を携えている。何か凄いことがありそうと、期待が湧く。

「花嫁をかつさらうか、式場で泣くか」

「もちろん、白馬の王子様なら女神様を連れ去るくらいの強引さがないとね？」

すすりさんと燐ちゃんの、選択肢のようであり、それは強制だった。

—— 行け。つーかさつさで行け。

そうとしか言っていない、目が。

「女の子って、そう言うサプライズに弱いもんよ。あんな仕事ダメダメなくせに音楽だけは天才な子なんて、案外そう言うのに弱いわね」

「そ、そうなの？」

「そうそう。だから早く行こうよ、店長。時間ないよ」

燐ちゃんが手を差し伸べてくる。その瞳は確信を持った柔らかいものだった。

「さ、行くよ。伝えないまま後悔したいの？ したくないの？」

すすりさんの物言いは、きつと一つの答えは受け付けない。

「……したくない」

俺と何気ないような出会いをして、魅せられた。そしてこの一年一緒に働いてきた。仕事の覚えは悪いし、反省しないし。でも、クラブサンの演奏は定評がある。おかげでここ一年のリピート率と新規獲得率は驚異的に伸びた。その原動力の彼女はやはり女神だったんだ。店長として経営者の俺にも、羽虫としての俺にも。

「なら、行けっ！ 女神様を魔王の巣窟から救い出すのよっ」

「……分かったっ！ 俺、行くっ！ 逃げ道の確保は任せるぞ」

そうだ。告白も出来ないまま終わる恋なんか、つまらない。リンドールにやってきた女神は、リンドール以外の場所で女神になんかさせない。俺が救い出してやる。

「最後の最後まで保身は忘れないね、店長」

「経営者の癖じゃないの？ さて、私らも行こっか。これで十分に時間取れたし」

「すずりさんって、悪魔だね。煽るだけ煽るなんて」

「あれえ？ 燐ちゃんはお洒落していきたくないのかなあ？ 良いんだよ？ お姉ちゃん一人でエステ行ってから参列するから。燐ちゃんは一人大店よろしく」

「ああん、すずりさん、ずるい。私も行きます、行きたいです。と言うか連れてって下さい」

「そうそう、素直が一番。可愛い子と馬鹿は私の好みだからねえ」

俺は走った。背中を押してくれた仲間の為にも、リンドールの華になったクラブサンの為にも、無論俺の為にも。

「ここか。すげえ。相手ってボンボン？」

式場。それは予想していた式場ではなく、フランスとかにありそうな教会のような絢爛な装飾のビルみたいな式場だった。俺にはこんなところで挙げられる資金なんかない。相手の男はどんな奴なんだよ。無性に嫉妬心が湧いた。

「とにかく、行くぞ」

足が急に重くなった。いざ来たは良いが、何も考えてないぞ。大

体俺が先に来ても、すすりさんも憐ちゃんも誰も来てないじゃん。女神を連れ出してどうすりゃいいんだよ。タクシー行っちゃったぞ？もう一度確認をする。この時間なら会場の下見をしてるか準備だろう。着替えなら難しい。でも会場に居るなら連れて行けば良い。

——その後は？

どうすれば良い？　すすりさんは任せとけとか言っただけど、絶対まだ来てない。と言うか今のうちにタクシーを手配しておくべきか？

「とりあえず、行くぞ」

澄み渡る青空に数回深呼吸した。絶好の拳式日和。さも俺は、ここに居る女神を連れ去ろうとする魔の手下。悪は俺。それくらいの常識はある。でも、俺は知ってる。クラブサンを弾ける小波は非常識だと。なら俺も非常識になれば良い。女神が人でないなら、俺も人でなくなってしまうばい。魔女の騎士にでも何にでもなれそうな気、だけはした。

「小……波っ！」

ドラマとか勢い良くドアが開く。そのつもりで開けようとしたら、想定外のドアの重さに息が力んで一瞬詰まった。両ドアを開けるのは無理だったから、片方のドアだけを力いっぱい押した。

「え……？」

声の響きの良さに自分の声に驚いたけど、俺の声は女神に、まだ届いた。何か昨日見た時よりも小波が綺麗になってる。艶があった。

「店……長？」

「ん？　小波？　知り合いか？」

二人がいた。男が旦那か。俺の方が顔は勝った。性格は、知らん。数回深呼吸をする。神聖な場を汚すであろう、俺の愚動。それでも俺は懺悔はしない。俺の神は、俺の宝物をいつも大事そうに、楽しそうに演奏してくれる女神だけだから。

「小波。先に謝っておく。俺の愚かな行動だ。すまない」

結婚は当人だけのものじゃない。だからこそ、俺は完全なる悪に

はなれなかった。靴音が想像以上に反響する。つい力が入って二人が立つ祭壇へ向かう。誰も居ない教会内に響く俺の足音。力強いのは靴音だけで、心臓は止まりそうなくらいにバクバク言ってる。

「え？ 何？ どうしたの、店長？」

近寄る俺に、女神が首を傾げる。これから起こる事態なんて知る由もないんだろうな。少し哀しい気もする。仕事じゃ結構甘い判断にしていたのに、気づかれてなかったか。怒られたのに。

「小波、こんなところにいるもんじゃない。俺と来い」

「え？」

二人が俺を怪訝に見る。痛い。その視線が痛い。でも、俺の背中には強い味方が居る。今は居ないけど。

「そいつと結婚なんかするな」

「て、店長……？」

「お前は俺の女神だ。だから他の男のものになんかなるな」

「は？ ちよつ、あんた何言って……」

「俺は、お前のことが好きだ。だから俺の傍にいろ」

男の言葉なんか聞こえない。聞かない。俺は小波の手をとった。

女神は今、俺の手の中にあつた。あの日、俺を虜にしたクラブサンを奏でる手が、温かい。

「……あつ、そういうことなんだあ」

すると、女神が微笑んだ。その瞬間、その笑顔が俺を見ていて、俺はすりさんに勝利を捧げた。魔王様、俺はやりました、と。

「ごめんね、琢磨。私、行かないと」

「え？ 小波？ どういうことだよ？」

俺は振り返ることなく来た道を戻る。抵抗なく女神が俺についてくる。

「あれだよ、あれ。店長が引き受けてくれたみたい」

「……ああ、そういうことか。あのっ」

男が俺を呼び止めた。

「小波のこと、よろしくお願いします」

「……は？」

お願いをされてしまった。よく分らないけど、どうやら俺は勝利を収めたらしい。女神は選んだ。この俺を。

「さ、店長。行こう行こう。時間ないよ」

「え？ あ、ああ……。なあ、小波。また、クラブサン、弾いてくれるか？」

「？ そんなの当たり前だよ。私、その為にリンドールに居るんだから」

その笑顔は、やはり女神だった。クラブサンを奏でる俺だけの女神。今、俺は幸せを噛み締めている。

「本番もさつきみたいにお願ひね、店長っ」

「……え？」

「え？ じゃないよお。私を連れ去るサプライズ。店長が引き受けてくれたんだよね。リンドールみんななら、出席者も知らないし、さつきみたいにお願ひねっ」

何かが崩れ落ちていく。

「あゝ、やっぱこうなるかあ」

「さすがは天才。非常識も最近の流行だと思ってるよ……」

女神の笑顔が、悪魔に見えてきた。俺の決意と、告白って……サプライズ扱い？

「さあて、式場で泣くを選択された哀れな手下の為にハンカチ買いに行こっか」

「煽った本人がその役目はダメじゃないかな？」

「惚れた弱みも、惚れさせられなきや意味がないってことが自覚できて良いんじゃない？ あの子の気持ちも知って後悔もしないっしょ？」

「トラウマになると思うよ、私は……」

「失礼ね。つまらない恋に浸ってダメ男になるよりも、女神がリンドールに残るって分っただけでも良いじゃん。また一緒に居られるんだし」

「逆に思いつくと思ふ、店長は」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5382e/>

リンダールの女神

2010年10月8日15時08分発行